

魯迅が仙台で受けた解剖学史の講義について

坂井 建雄

順天堂大学医学部 解剖学・生体構造科学

受付：平成20年7月17日／受理：平成20年10月31日

要旨：魯迅の「藤野先生」では、解剖学の最初の授業で、骨学を担当する藤野教授が日本の解剖学史についての講義を行い、さまざまな解剖学書を供覧したと描かれているが、現存する魯迅の授業ノートに解剖学史の内容は含まれていない。しかしその上級の学生たちの講義ノートに解剖学史の内容が記録されていることから、この年の解剖学の授業で解剖学史の講義が行われなかったと考える理由がない。また当時の時間割によると解剖学の最初の授業は藤野が担当しており、「藤野先生」の最初の講義の描写は事実に基づくと考えられる。魯迅が聞いた解剖学史の講義は、3年上級の齋藤龍祥のノートに記録された敷波による解剖学史を雛形にしたものであると推定される。

キーワード：解剖学史，明治時代，医学教育，魯迅，仙台医学専門学校

魯迅（本名，周樹人）の自伝的作品集『朝花夕拾』（1928）に収録された「藤野先生」は、魯迅が1904年（明治37）9月からの1年7ヵ月間に仙台医学専門学校（以下，仙台医専と略）で医学を学んだ思い出，とくに授業ノートの添削指導を受けた解剖学教授の藤野巖九郎に対する尊敬の念が物語られている。この作品に対する関心から，20世紀初頭の仙台医専について資料の収集と存命していた同級生たちへのインタビューなど活発な調査が1970年代に行われ，その成果は『仙台における魯迅の記録』として刊行されている¹⁾。その後も東北大学では魯迅の仙台時代についての研究が継続して行われ，その成果をまとめた書物がいくつ出版されている^{2,3,4,5)}。魯迅の授業ノート，および東北大学に所蔵されている当時の学生のノートも発掘されており，20世紀初頭の仙台では医学教育に関する資料が積み上げられ，近代医学教育の歴史においても稀有なほどに医学教育の実態が明らかにされている⁶⁾。

20世紀初頭の仙台医専では，解剖学の授業の中で解剖学の歴史が講義されていた。「藤野先生」の冒頭近くで，魯迅が仙台医専で受けた最初の解剖学の授業の様子が次のように描かれている。

以来，たくさんの新しい先生に会い，たくさんの目新しい講義を聞いた。解剖学は二人の教授が担当していた。最初は骨学だった。その時間，はいつてきたのは色の黒い，痩せた先生で，八字ひげを生やし，眼鏡をかけ，大きな本や小さな本をひと山小脇に抱えていた。それを教卓に置くと，ゆっくりとした，ひどく抑揚のある口調で，学生に向かって自己紹介した。

「私が藤野巖九郎という者でありまして……」
後ろのほうで何人かが笑い声をあげた。先生はつづけて，解剖学の日本における発達の歴史を講述したが，それら大小さまざまな本は，初期から現在にいたるこの分野の学問に関する著作だったのである。初期の何冊かは糸綴じのもので，中国で出版された翻訳書を複製したものもあった。日本における新しい医学の翻訳，研究は，中国より早く始められた訳ではなかったのだ⁷⁾。

藤野教授の風貌と人柄，そして最初に行われた解剖学史についての講義の様子を見事に描き出している。ここで描かれた事柄を整理すると，①解剖学の最初の授業を藤野教授が行ったこと，②藤

野教授の担当した科目が骨学であったこと、③解剖学の最初の授業で日本の解剖学の歴史が講義されたこと、④その授業の中で解剖学書のいくつかが供覧されたこと、である。授業の様子が具体的に生き生きと描かれている。しかしこの描写には大きな問題がある。そもそも現存する魯迅の授業ノートには解剖学史の内容が含まれていないのである。

魯迅の授業ノートは、現在北京の魯迅博物館に所蔵されており、国宝に相当する国家一级文物の指定を受けている。そのデジタル画像が2005年に東北大学に対して供与され、魯迅の仙台時代についての研究が急速に進んだ。添削がおもに文章表現や修辞に関するものであること、2年次になるまで添削が続けられていること、図に対する注意が確認されたことなど、「藤野先生」の描写がノートから裏付けられた。その一方で、魯迅のノートの最初の2ヵ月の部分は清書されているがそれ以後の部分は筆録になっていること、最初の2ヵ月のノートの解剖図からみて魯迅の学習状況に問題があったことなど、新しい発見があった⁸⁾。さらに授業ノートをもとにして魯迅の仙台時代を再構成したところ、2年生の冬休みを経て2学期に入ったところで、藤野教授による添削および復習の痕跡がなくなっており、退学を決める2ヵ月近く前から魯迅の学習意欲が低下していることが明らかになった^{9,10,11,12)}。「藤野先生」で描写された事柄で、事実と異なるところがいくつか指摘されている。これまで収集された資料および授業ノートと照らし合わせて、その多くは記憶の誤りであると了解できる程度のものであり、意図的に事実をねじ曲げたと証明できるものは見あたらなかった¹³⁾。

本稿では「藤野先生」の中の最初の授業についての描写が、体験に基づくものなのか、まったくの創作なのか、これまで収集された魯迅の時代の仙台医専についての資料、とくに魯迅とその同時代の学生の授業ノートに基づいて検証する。またその検証作業を通じて、20世紀初頭の医学教育およびその中の解剖学史の教育についてもその実態を明らかにしていく。

1. 解剖学の最初の授業の担当者

魯迅が仙台医専に入学した1904年度に、解剖学の授業は敷波重治郎と藤野厳九郎の2名の教授が担当していた¹⁴⁾。魯迅の授業ノートにおいても、科目の扉に担当者の名前が掲げられているが、解剖学では敷波と藤野の2人の名前が記されている。魯迅が受けた最初の授業を、敷波重治郎と藤野厳九郎のどちらが担当したかは、授業ノートからは解明できない。

敷波重治郎(1872-1965、明治5-昭和40)は、金沢に生まれて第四高等中学校医学部を卒業し、1897年(明治30)に東京帝国大学医科大学助手となって解剖学を専攻した。1900年(明治33)に第二高等学校医学部に解剖学の教授として迎えられ、その年の9月の1学期から授業を担当している。同校は1901年(明治34)に改組されて仙台医学専門学校となった。1906年(明治39)から2年間、ドイツのヴュルツブルク大学のシュテール Stöhr 教授のもとに留学して胆嚢上皮についての比較組織学的研究を行った。1912年(明治45)に仙台医専が改組されて東北帝国大学医学専門部となるとその解剖学教授となり、1915年(大正4)に東北帝国大学医科大学が創設されるとその助教授となった。1922年(大正11)に岡山医科大学の解剖学第3講座の教授に着任し、1941年(昭和16)に満69歳で退職するまでその職にあった^{15,16)}。

藤野厳九郎(1874-1945、明治7-昭和20)は、福井に生まれて愛知県立愛知医学校を卒業し、1896年(明治29)に同校助手、1897年(明治30)に助教諭となり、東京帝国大学医科大学に出張して1年間解剖学を学んだ。1901年(明治34)10月に仙台医学専門学校解剖学の講師として着任し、翌1902年(明治35)1月から始まる2学期から授業を担当している。1904年(明治37)に教授に昇進し、1912年(明治45)に東北帝国大学医学専門部の教授になったが、1915年(大正4)に東北帝国大学医科大学の創設に際して退職した。1916年(大正5)から1年間、三井慈善病院(現・三井記念病院)にて耳鼻咽喉科の講習を受け、

1917年（大正6）に郷里に戻って耳鼻科の診療を行い開業した^{17,18)}。

魯迅を迎えた1904年度（明治37）の仙台医専の入学式は1904年（明治37）9月12日（月）に行われ、その翌日の13日（火）に最初の授業が行われた。河北新報の1904年（明治37）9月13日第5面に「各学校始業式」の記事がある¹⁹⁾。

△第二高等学校 昨十二日午前八時生徒（新入生一六九名）講堂の着次に職員入場と共に校長中川元氏は一同に対し教育は時局と雖ども大切なることなりとの訓命に基き一場の演説を為し夫より生徒の心得に付縷々述ぶる所ありて九時終了、本日より授業開始の筈

△医学専門学校にては昨日午前九時半より新入学者（医科百十名薬学科十九名）の入学式を挙行し山形校長より種々の懇示ありて式を了したるが今十三日より始業する筈

授業の初日の9月13日に、魯迅は事務の人に連れられて教室に現れ、同級生たちに紹介された。魯迅の同級生の鈴木逸太氏が1974年8月8日のインタビューの中で証言している²⁰⁾。

仙台医専の時間割が、東北大学史料館に残されている⁸⁾。それによると、魯迅が仙台医専で最初の授業を受けた1904年（明治37）9月13日（火）には、8時から12時まで4コマ、13時から1コマの授業があった。午前には組織学（敷波）、化学（佐野）、物理学（六波羅）、ドイツ語（小高）があり、午後には藤野教授担当の解剖学の授業があった。すなわち、魯迅が受けた解剖学の最初の授業は藤野厳九郎によって行われたことになる。

「藤野先生」に描かれた最初の解剖学の授業についての第1の事柄、①解剖学の最初の授業を藤野教授が行ったことは、資料からも支持されることが確認された。

2. 骨学の授業の担当者

仙台医学専門学校の1904年度（明治37）の時間割では、講義の1コマが1時間で、午前は7時から12時まで5コマ、午後は13時から15時まで

2コマの計7コマの範囲で組まれているが、実際の講義は毎日5コマ程度になっており、週に30コマ強の授業が行われていた。1904年度（明治37）の1年次1学期は31コマの授業が行われ、そのうち解剖学の講義は9コマ、2学期では30コマ中の8コマ、3学期では34コマ中の8コマが解剖学であった。（表1）

魯迅の授業ノートでは、1年次の解剖学は8科目に分かれている。科目の分冊ノートには扉があり、科目の表題がラテン語で、担当者名がローマ字で記されている。科目は緒論、骨学、靱帯学、筋学、血管学、神経学、内臓学、感覚器学であり、緒論のノートの最後に系統解剖学を7類に分けているのに対応している²¹⁾。時間割には解剖学の中の科目の名称が記されておらず、敷波教授と藤野教授がどのように分担したかは示されていない。一方、魯迅の授業ノートには科目毎に扉がつけられていて、授業担当者の名前が記されている。それによると、敷波教授は骨学、靱帯学、内臓学、感覚器学を担当しており、藤野教授は筋学、血管学、神経学を担当している。緒論のための扉はないが、その直前にノート全体の扉があり「Lehrbuch der ANATOMIE des Menschen von J. Hikinami, u. G. Fuzino. Prof. an d. medicinische Anatomie an Sendai」と書かれているので、緒論は敷波・藤野両教授が担当した可能性が高い。（表2）

科目の分担および授業ノートに記された授業の構成から、敷波教授と藤野教授が関連する科目を並行して教えながら、生徒の理解の便を図っていたことが窺われる。敷波教授の骨学と靱帯学には藤野教授の筋学が対応し、敷波教授の内臓学には藤野教授の血管学、敷波教授の感覚器学には藤野教授の神経学が対応する、といった具合である。なお、魯迅の授業ノート第4冊では感覚器学、内臓学の順になっているが、ノートの筆跡から判断して実際の講義の順序は逆であったと考えられる⁸⁾。

敷波は1900年（明治33）に、藤野は1901年（明治34）に仙台に着任している。敷波・藤野両教授は、1901年（明治34）からすでに分担して解剖学の授業を行っていた²²⁾。藤野は1901年（明

表1 仙台医学専門学校1904(明治37)年度一年次の時間割

		1時限 7-8時	2時限 8-9時	3時限 9-10時	4時限 10-11時	5時限 11-12時	6時限 13-14時	7時限 14-15時
1904年 (明治37) 9月 医学科 1年次 1学期	月曜	体操	ドイツ語 小高	解剖学 敷波	ドイツ語 小高	物理学 六波羅	化学 佐野	
	火曜		組織学 敷波	化学 佐野	物理学 六波羅	ドイツ語 小高	解剖学 藤野	
	水曜		解剖学 敷波	解剖学 藤野	ドイツ語 小高	倫理学 三好	解剖学 敷波	
	木曜		組織学 敷波	体操	化学 佐野	解剖学 藤野	ドイツ語 小高	
	金曜		化学 佐野	解剖学 敷波	ドイツ語 小高	体操	物理学 六波羅	
	土曜	解剖学 敷波	ドイツ語 小高	解剖学 藤野	化学 佐野	ドイツ語 小高		
		1時限 7-8時	2時限 8-9時	3時限 9-10時	4時限 10-11時	5時限 11-12時	6時限 13-14時	7時限 14-15時
1904年 (明治37) 12月改訂 医学科 1年次 1学期	月曜	体操	ドイツ語 小高	解剖学 敷波	ドイツ語 小高	物理学 六波羅	化学 佐野	
	火曜		組織学 敷波	化学佐野	物理学 六波羅	ドイツ語 小高	解剖学 藤野	解剖学 敷波
	水曜		解剖学 敷波	体操	ドイツ語 小高	倫理学 三好	解剖学 敷波	
	木曜		組織学 敷波	解剖学 敷波	化学 佐野	解剖学 藤野	ドイツ語 小高	
	金曜		化学 佐野	解剖学 敷波	ドイツ語 小高	体操	物理学 六波羅	
	土曜		ドイツ語 小高	解剖学 藤野	化学佐野	ドイツ語 小高		
		1時限 7-8時	2時限 8-9時	3時限 9-10時	4時限 10-11時	5時限 11-12時	6時限 13-14時	7時限 14-15時
1905年 (明治38) 1月 医学科 1年次 2学期	月曜		ドイツ語 小高	化学 佐野	ドイツ語 小高	物理学 六波羅	解剖学 敷波	
	火曜		ドイツ語 小高	化学 佐野	物理学 六波羅	組織学 敷波	ドイツ語 小高	
	水曜		解剖学 藤野	倫理学 三好	体操	解剖学 敷波	解剖学 藤野	
	木曜		解剖学 藤野	組織学 敷波	組織学 敷波	体操	ドイツ語 小高	ドイツ語 小高
	金曜		解剖学 藤野	解剖学 敷波	体操	化学 佐野	ドイツ語 小高	
	土曜		解剖学 敷波	物理学 六波羅	化学 佐野	ドイツ語 小高		
		1時限 7-8時	2時限 8-9時	3時限 9-10時	4時限 10-11時	5時限 11-12時	6時限 13-14時	7時限 14-15時
1905年 (明治38) 4月 医学科 1年次 3学期	月曜	ドイツ語 小高	解剖学 敷波	組織学 敷波	生理学 横田	ドイツ語 小高	解剖学 藤野	
	火曜	ドイツ語 小高	解剖学 藤野	解剖学 敷波	組織学 敷波	生理学横 田	体操	
	水曜	ドイツ語 小高	組織学 敷波	生理学 横田	組織学 敷波	ドイツ語 小高	体操	
	木曜		解剖学 藤野	組織学 敷波	解剖学 敷波	生理学 横田	ドイツ語 小高	
	金曜	体操	組織学 敷波	生理学 横田	倫理学 三好	ドイツ語 小高	解剖学 藤野	
	土曜	ドイツ語 小高	解剖学 敷波	生理学 横田	化学 佐野	生理学 横田		

表2 魯迅の解剖学の授業ノート

第1冊 (306頁)		
解剖学総論 (12頁)	1年次1学期	敷波・藤野教授
骨学講義 (102頁)	1年次1学期	敷波教授
骨格図 (31頁)		
靱帯学 (59頁)	1年次1学期	敷波教授
筋学 (56頁)	1年次1学期	藤野教授
筋肉図 (42頁)		
第2冊 (328頁)		
血管学 (123頁)	1年次2学期	藤野教授
神経学 (126頁)	1年次3学期	藤野教授
局所解剖学 (77頁)	2年次1-2学期	藤野教授
第4冊 (326頁)		
感覚器学 (123頁)	1年次3学期	敷波教授
内臓学 (200頁)	1年次2学期	敷波教授

治34)の10月に講師として着任し、時間割の上では2学期から講義を担当するようになっていた²³⁾。この年の解剖学の講義を記録した齋藤龍祥のノートでは、解剖学のノートが2冊に分かれており、第1冊には総論に続いて骨学、靱帯学、内臓学、感覚器学、発生学、顕微鏡用法の講義が記録されている。解剖学の総論は藤野の着任前の授業で敷波の担当であり、顕微鏡用法は2年次で敷波が担当した授業である。解剖学ノートの第2冊には、筋学、血管学、神経学、局所解剖学の講義が記録されている。局所解剖学は2年次で藤野が担当した授業である。したがって齋藤の授業ノートの解剖学(1)は敷波の講義、解剖学(2)は藤野の講義を記録したものであると考えられ、1904年(明治37)の魯迅の授業ノートにおける授業の分担ときわめてよく一致する。(表3)

さらに1904年(明治37)の授業では、骨学での講義内容と筋学での講義内容を対応させるために、細かな工夫がなされている。1901年(明治34)の齋藤龍祥のノートと1904年(明治37)の魯迅のノートを比較すると、その工夫の様子が分かる。齋藤ノートでは骨学・筋学ともに上肢と下肢を最後に教えているが、魯迅ノートでは上肢と

下肢が最初に教えられている。背部と胸部にある筋の表層のものは、上肢に停止しており機能的には上肢の筋に分類される。そのため骨学と筋学を並行して教える場合に厄介なものである。1904年(明治37)の授業では上肢と下肢から教えており、筋学で個々の筋について教える前に関係する骨が教えられていて、学生にとっても理解しやすかったと考えられる。(表4)

このように骨学の授業を藤野教授ではなく敷波教授が担当していたことは、仙台医専における1901年(明治34)と1904年(明治37)の授業ノートから裏付けられた。「藤野先生」で藤野が骨学を担当していたという描写は、当時の資料と明らかに矛盾する。しかし魯迅が作品構成上の意図から事実と異なる描写をしたとは考えにくい。授業ノートを紛失していて、確認しようにもその手だてがなかったのである。魯迅は北京に引越す際に、授業ノートを紛失しており、そのことは「藤野先生」の中に描かれている。このノートは1951年に紹興の親戚の家で発見され、1956年に魯迅夫人の許広平女子から国家に寄贈された^{24, 25)}。さらに藤野は骨についての研究をしており²⁶⁾、また纏足により足の骨が変形することに関心をもち魯

表3 齋藤龍祥の解剖学授業ノート

解剖学第1冊 (560頁)		解剖学第2冊 (426頁)	
総論	1-14頁	筋学	1-99頁
骨学	15-131頁	血管学*	101-241頁
靭帯学	132-177頁	神経学	242-367頁
内臓学	178-344頁	局所解剖学	1-59頁
感覚器学	345-413頁		
発生学	1-71頁		
顕微鏡用法	1-69頁		
組織学実習標本リスト	1-7頁		

*血管学の後に、頁番号無しでリンパ管のノートが4頁綴じ込まれている。

表4 齋藤ノートと魯迅ノートにおける骨学と筋学の構成

齋藤ノート (1901年)		魯迅ノート (1904年)	
骨学各論	筋学各論	骨学各論	筋学各論
体幹	背部	上肢	上肢
頭蓋	頭頸部	下肢	下肢
上肢	胸腹部	体幹	背部
下肢	上肢	頭蓋	頭頸部
	下肢		胸腹部

迅に不躰な質問をしたと「藤野先生」の中に描かれている。そういった記憶も影響したであろうし、また解剖学の各論の中では骨学が最初に教えられるのが通例なので、最初の講義が骨学に違いないと単純に思いこんでしまったのかもしれない。

3. 解剖学の授業の冒頭に行われる 解剖学史の講義

解剖学史は、解剖学の授業や解剖学書の中で必ずしも扱われるものではない。解剖学の授業は系統的に構成されており、総論に続いて器官系を扱う各論が講義される。このような構成のものを系統解剖学といい、魯迅の時代の解剖学書の多くはこの様式をとっている。解剖学書の中で解剖学史を扱う場合には、必ずといっていいほど冒頭の総論の中に含まれている。

魯迅の時代の仙台医専で使われていた解剖学書がいくつか知られているが、その中で解剖学史を

含むものがあり、いずれも冒頭の総論の中に解剖学史が含まれている。

○奈良坂源一郎の『解剖大全』全3巻²⁷⁾：奈良坂源一郎(1854-1934, 安政1-昭和9)は1881年(明治14)に東京大学医学部を卒業し、愛知県愛知医学校の解剖学の教授となった²⁸⁾。藤野は愛知医学校で奈良坂から解剖学を学んでおり、『解剖大全』が藤野巖九郎記念館(あわら市)に遺品として所蔵されている。『解剖大全』では第1巻の始めの第1篇総論の冒頭で、20頁にわたって「沿革略史」として解剖学の歴史が記述されている。1943年(昭和18)の日本解剖学会の調査で、『解剖大全』の東北帝国大学での所在が分かっている²⁹⁾。

○ヒルトルの『人体解剖学教科書』³⁰⁾：ヒルトル Hyrtl, Joseph (1810-1894)はプラハ大学とウィーン大学で解剖学教授を務め、『人体解剖学教科書』(1846年初版)は22版まで版を

重ね、1863年の第8版では、総論の最後のあたりで17頁にわたって解剖学の歴史が扱われている。1943年（昭和18）の調査で仙台に所在が確認される²⁹⁾。

○ラウベルの『人体解剖学教科書』³¹⁾：ラウベル Rauber, August Antinous (1841-1917) はドルパト大学（現・エストニア領タルトゥ）の解剖学教授を務め、イギリスのクエインの解剖学書をホフマンが訳したものを改訂し、『人体解剖学教科書』第4版（1892, 1894）として出版した。冒頭近くで20頁にわたって解剖学の歴史が述べられている。1943年（昭和18）の調査で仙台に所在が確認される。齋藤龍祥の授業ノートに描かれた骨格の図のいくつかはこの本に基づくものである⁸⁾。

○ゲーゲンバウルの『人体解剖学教科書』³²⁾：ゲーゲンバウル Gegenbaur, Carl (1826-1903) はイエナ大学の動物学教授、ハイデルベルク大学の解剖学教授を務め、『人体解剖学教科書』（1883年初版）は1899年の第7版まで版を重ね、第8版が没後の1909年に出版されている。1892年の第5版では、総論の初めの方で32頁にわたって解剖学の歴史が述べられている。1943年（昭和18）の調査で仙台に所在が確認されている。魯迅の授業ノートに描かれた血管の図はこの本に基づくものであり⁸⁾、魯迅の同級生の小野豊三郎はこの本から骨格と筋肉の図を模写したと考えられる⁶⁾。

しかし当時よく使われていた他の解剖学の教科書で、松村矩明の『解剖訓蒙』全20巻、田口和美の『解剖訓蒙』全13巻、東京大学医学部編『医科全書 解剖篇』全24巻、今田東『実用解剖学』全3巻、石川喜直『人体解剖学』全5巻には解剖学史が含まれていない。

魯迅のもの以外に、この時代の3人の学生の授業ノートが東北大学に残されている。仙台での解剖学の授業で解剖学史の講義がされていたことは、これらのノートから裏付けられる。1900年（明治33）の解剖学の授業を記録した柳澤廣三郎のノート、1901年（明治34）の齋藤龍祥のノ

ートでは、いずれも冒頭に解剖学総論があり、その中で解剖学史が記述されている。1900年（明治33）は敷波重治郎が仙台に赴任した最初の年であり、1901年（明治34）は2年目である。藤野厳九郎は10月に着任するので、どちらの解剖学史も敷波が講義したものである。（図1,2）

柳澤の授業ノートでも齋藤の授業ノートでも、解剖学の歴史の話は2部に分かれており、前半は世界の解剖学史、後半は日本の解剖学史を扱っている。ただし解剖学史のノートの分量には大きな差がある。柳澤ノートでは解剖学の総論が4頁あり、その第2-3頁に解剖学の歴史が書かれている。齋藤ノートでは第1冊の冒頭14頁が解剖学総論であり、解剖学史はその3-6頁に書かれている。柳澤ノートの解剖学史が2頁であるのに対し齋藤ノートでは4頁である。齋藤ノートの解剖学史は、その内容の豊富さと正確さにおいて柳澤ノートを遙かにしのいでいる。敷波は1年目で準備不足だった解剖学史の講義を、2年目で充実させたものと考えられる。柳澤廣三郎と齋藤龍祥の授業ノートにおける解剖学史の講義の記録を、資料として別に掲載する³³⁾。

仙台医専では1900年（明治33）と1901年（明治34）の解剖学の授業の冒頭で敷波が解剖学史の講義を行っており、魯迅が受けた1904年（明治37）の授業で解剖学史の講義をあえて行わなかったと考える理由は見あたらない。「藤野先生」における解剖学史の講義の描写がきわめて具体的に生き生きとしているので、魯迅は解剖学の最初の授業で実際に解剖学史の講義を聞き、その記憶をもとに作品を書いたと考えられる。しかも解剖学の最初の授業は藤野が行っていることは先に示された。これらのことから解剖学史の講義を行ったのは「藤野先生」に描かれているとおり、敷波ではなく藤野であったと推定される。1904年（明治37）の解剖学史の講義の記録は本来あったと考えてよいだろう²⁵⁾。それが魯迅の授業ノートから失われてしまった事情は分からない。

魯迅が解剖学史の話は藤野から聞いたのだとすると、その内容は敷波がそれ以前に行った講義そのままではなかっただろう。しかしすでに敷波が

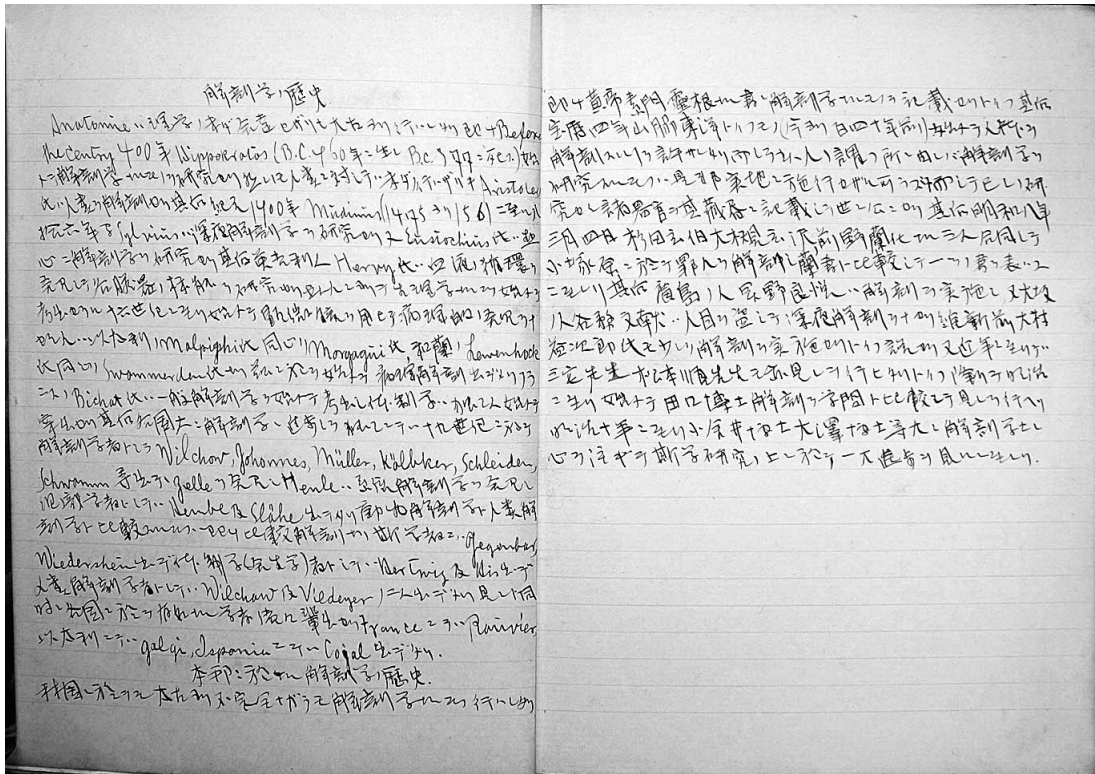


図1 柳澤廣三郎の解剖学授業ノートから解剖学の歴史

話していた解剖学史を、まったく無視して新たに作り上げたとは考えにくい。すでに何度か講義をしていた敷波による解剖学史を参考にして作られたものと考えてよいだろう。その意味で、柳澤廣三郎と齋藤龍祥の授業ノートに記録された解剖学史は、魯迅が聞いた解剖学史そのものではないにしても、その雛形にあたるものであり、内容的にも近いものであったと考えられる。とくに齋藤ノートの解剖学史は内容が充実しており、魯迅が聞いた解剖学史により近いものであると考えられる。魯迅の「藤野先生」では、解剖学の日本における発達の歴史を講述したと述べているので、藤野の授業では世界の解剖学史については触れられなかったものと考えられる。

齋藤龍祥の解剖学史に挙げられている解剖学関係の人名は、世界の解剖学史で41人、日本の解剖学史で23人である。世界の解剖学史では古代のヒポクラテスから16世紀のヴェサリウスを経て19世紀末の解剖学まで、幅広く紹介している。

またイタリア、オランダ、フランス、ドイツ、イギリスの各国についてバランスよく扱っている。日本の解剖学史では、漢方医学について触れた後、江戸時代中期の山脇東洋の腑分けと『蔵志』、杉田玄白と前野良沢によるオランダ語の解剖学書を翻訳した『解体新書』の出版について述べている。とくに仙台における木村寿禎の腑分けとその悲劇が大きく扱われている。また明治以後では美幾女の特志解剖、ミュレルとホフマンから始まる東京大学医学部での解剖学を大きく扱っている。

4. 解剖学史の講義で供覧された解剖学書

「藤野先生」の描写では、解剖学の著作を多数供覧したこと、その初期のものが糸綴じであったこと、中国で出版された翻訳書を複製したものが含まれていたことが述べられている。どのような解剖学書が供覧されたのだろうか。

糸綴じの解剖学書は、江戸時代から明治10年頃まで出版されていた。その中で仙台での所在が

確認できたものがいくつかある。

○杉田玄白らによる『解体新書』全5巻³⁴⁾：この本の原著はクルムス(1689-1745)がドイツ語で著した『解剖学表』(1722年初版)のオランダ語訳(1734)である^{35, 36)}。前野良沢と杉田玄白らが、各表の冒頭の図と簡条書き部分を訳出し、他の資料からの図などを加えて、『解体新書』(1774, 安政3)として出版した。現在、東北大学附属図書館医学分館に所蔵されている。

○三谷公器の『解体発蒙』全5巻³⁷⁾：三谷公器(1755-1823, 宝暦5-文政6)は小野蘭山の弟子で、古来の五臓六腑説に解剖所見を加えて漢蘭折衷の説を立てた。『解体発蒙』の解剖図は多色刷り木版画で、1802年(享和2)に京都で行われた腑分けをもとに描かれている。現在、東北大学附属図書館医学分館に所蔵されている。

○宇田川榛齋の『医範提綱』3巻³⁸⁾：宇田川榛齋(1770-1835, 天明6-天保5)は江戸後期の蘭学者で数多くの翻訳を行った。『医範提綱』は平易な文章で書かれ、解剖学を広めるのに役立った。この本の付録として出された『内象銅版図』(1808, 文化6)には、日本における最初の銅版図の解剖図が収められている。1943年(昭和18)の調査で仙台での所在が確認される²⁹⁾。

○田口和美の『解剖攬要』14巻³⁹⁾：田口和美(1839-1904, 天保10-明治37)は、江戸で西洋医学を学び、佐野で開業、その後大学東校で解剖学を研究し、1877年(明治10)に東京大学医学部の初代の解剖学教授になった。『解剖攬要』はドイツ人教師のディッセの講義をもとに書かれた解剖学書である。あわら市の藤野巖九郎記念館に第二高等中学校および仙台医学専門学校図書室の図書票のついた『解剖攬要』が所蔵されている。

この他に和綴じのものとして松村矩明の『解剖訓蒙』全20巻(1872, 明治5)と東京大学医学部編『日講紀聞医科全書解剖篇』全24巻(1875, 明治8)などがあるが、仙台での所在は確認できて

いない。

中国で出版された翻訳書を複製したものは、以下のものが考えられる。

○合信の『全体新論』⁴⁰⁾：『全体新論』はイギリス人宣教師のホブソンHobson, Benjamin(1816-1873, 中国名：合信)が中国語で執筆した解剖学書で、中国で広く読まれた⁴¹⁾。日本では翻刻版の他に翻訳版も出版されている。周樹人は『全体新論』を南京の礦務鉄道学堂時代に読んでいる。『全体新論』は東北大学附属図書館に所蔵されている。

石黒厚訳『全体新論訳解』など『全体新論』の日本語訳は、仙台での所在が確認できていない。

明治時代に刊行された日本の解剖学書は、4期に分けることができる⁴²⁾。このうち第1期のものと第2期の一部は和綴じである。(表5)

- (1) 第1期は、1877年(明治10)頃までにおもに英語の解剖学書から翻訳ないし抄訳されたもので、代表的なものは松村矩明訳の『解剖訓蒙』和装20冊(1872, 明治5)である。
- (2) 第2期は1887年(明治20)頃までドイツ人教師の講義をもとにしたもので、田口和美の『解剖攬要』和装13巻14冊(1877-1882, 明治10-17)、奈良坂源一郎の『解剖大全』3巻(1883, 明治16)などがある。
- (3) 第3期は1904年(明治37)頃までドイツ語の解剖学書をもとに書かれたもので、今田東の『实用解剖学』全3巻(1887, 明治20)、石川喜直の『人体解剖学』全5巻(1903-1904, 明治36-37)などがある。
- (4) 第4期は1905(明治38)年頃以後に独自に書き下ろされたもので、大澤岳太郎の『新撰解剖学』全4巻(1905-1911, 明治38-44)、二村領次郎の『近世解剖学』全2巻(1907-1908, 明治40-41)などがある。

魯迅が仙台で学んだ時期までに出版されていたのは、第3期までの解剖学書である。これらの日本語の解剖学書の中で、藤野教授の周辺にあったことが確認できたのは、第2期と第3期のドイツ医学の影響の強い解剖学書のみで、英語から訳された第1期のものは確認できていない。第2期に

表5 明治期の代表的な解剖学書

第1期, 1867 (明治1)–1877 (明治10) : 英語の解剖学書の翻訳 篠田秀道 (訳) 『解体説約』和装2冊, 1870 (明治3) 松村矩明 (訳) 『解剖訓蒙』和装20冊, 1872 (明治5) 武昌吉 (訳) 『解体説略』和装3冊, 1873 (明治6) 岡澤貞一郎 (訳) 『解剖必携』和装6冊, 1873 (明治6) 邨上典表 (訳) 『華氏解剖摘要』和装9冊, 1877 (明治10)
第2期, 1877 (明治10)–1887 (明治20) : ドイツ人教師の講義をもとにしたもの 東京大学医学部 (編) 『医科全書 解剖篇』和装, 24冊, 1877–1884 (明治10–17) 田口和美 『解剖攬要』和装全13巻14冊, 1877–1882 (明治10–15) 奈良坂源一郎 『解剖大全』全3巻, 1883 (明治16)
第3期, 1887 (明治20)–1904 (明治37) : ドイツ語の解剖学書をもとにしたもの 今田東 『実用解剖学』全3巻, 1887 (明治20) 中島一可訳 『解剖学講本』全3巻, 1893–1894 (明治26–27) 石川喜直 『人体解剖学』全5巻, 1903–1904 (明治36–37) 石原弘編 『人体解剖学』全3巻, 1903–1911 (明治36–44)
第4期, 1905 (明治38) 以後 : 独自に書き下ろされたもの 大澤岳太郎 『新撰解剖学』全4巻, 1905–1911 (明治38–44) 森田齋次 『解剖学講義』全3巻, 1906–1909 (明治39–42) 二村領次郎 『近世解剖学』全2巻, 1907 (明治40)

属する田口和美の『解剖攬要』和装13巻14冊 (1877–1882, 明治10–17)³⁹⁾、奈良坂源一郎の『解剖大全』3巻 (1883, 明治16)²⁷⁾ についてはすでに紹介した。第3期に属するものでは以下のものが藤野教授の周辺に存在しており、授業中に供覧された可能性がある。

○今田東の『実用解剖学』3巻⁴³⁾ : 今田東 (1850–1889, 嘉永3–明治22) は正規の医学教育は受けていないが、東京大学医学部で解剖学を研鑽して助教となった。『実用解剖学』(1887–1888, 明治20–21 初版) は簡明な解剖図を多数含む人気の高い解剖学書で、昭和になっても版を重ねていた。1943年 (昭和18) の調査により仙台での所在が確認されている²⁹⁾。

○石田喜直の『人体解剖学』5巻⁴⁴⁾ : 石川喜直 (1859–1916, 安政6–大正6) は金沢医学専門学校教授を務め、解剖学の著作が数多くある。『人体解剖学』(1903–1904, 明治36–37 初

版) は、精緻な解剖図を多数含んだ優秀な解剖学書で、著者の没後の第6版まで版を重ねている。魯迅の同級生の小野豊三郎が所有しており、解剖図の模写に用いていた⁶⁾。

外国語の教科書で仙台において使われていたものが、いくつか確認できる。ドイツ語のものではヒルトル、ラウベルおよびゲーゲンパウルの『人体解剖学教科書』^{30, 31, 32)} についてはすでに紹介した。これ以外に、以下のものが藤野教授の周辺に存在していた。

○トルトの『学生と医師のための解剖学図譜』全2巻⁴⁵⁾ : トルト Toldt, Karl (1840–1920) はプラハとウィーンで解剖学教授を務めた。『学生と医師のための解剖学図譜』全6巻 (1896–1897 初版) は定評のある解剖図譜で1979年の第27版まで改訂を続けた。魯迅の授業ノートの血管の図に、本書と酷似した図があり、藤野教授が本書の図を板書しながら

授業をしたと考えられる⁶⁾。

○シェーファー編の『クエイン解剖学要論』全3巻9冊⁴⁶⁾：シェーファー Schäfer, Edward Albert (1850–1935) はロンドン大学とエジンバラ大学で教授を務め、優れた解剖学および生理学の教科書を残している。クエイン Quain, Jones (1796–1865) の『解剖学要論』(1828初版) は、1867年の第7版からシャーピー Sharpey, William (1802–1880) に引き継がれた。1896–1899年の第10版からシェーファーが引き継いで改訂を行い全3巻9冊に改められた。シェーファー編の『クエイン解剖学要論』は、1943年(昭和18)の調査で所在が確認され、藤野巖九郎記念館(あわら市)に藤野の遺品として所蔵されている。

この当時に仙台で使われていた外国語の解剖学書はおもにドイツ語のもので、主要なものがほぼ揃っていた。外国語の解剖学の教科書の1904年(明治37)以前の版で上記以外のもので、1943年(昭和18)の調査で仙台に所在が確認できるものにはドイツ語のものが多く、ヘンレ Henle, Friedrich Gustav Jacob (1809–1885) の『人体系統解剖学提要』全3巻(1855–1871初版)、ルシュカ Luschka, Hubert (1820–1875) の『人体解剖学』全3巻6冊(1862–1867)、ホルシュタイン Hollstein, Lion (1811–1892) の『人体解剖学教科書』(1852初版)の1873年版、クラウゼ Krause, Wilhelm (1833–1909) の『人体解剖学提要』全3巻(1876–1880初版)、アイスラー Eisler, Paul (1862–1935) の『人体解剖学基礎』(1893初版)、パンシュ Pansch, Adolph (1841–1887) の『人体解剖学基礎』(1881初版)の1891年版、およびシュティエダ Stieda, Ludwig (1837–1918) によるその1900年改訂版、ハイツマン Heitzmann, Carl (1836–1896) の『人体記述局所解剖学』全2巻(1870–1875初版)の1896年版があった。フランス語のものではクルヴェリエール Cruveilhier, Jean (1791–1874) の『記述解剖学概論』(1834初版)の1874–1877年版、サペー Sappey, Marie Philibert Constant (1810–1896) の『記述解剖学概論』全3巻(1853初版)の1888–1889年版があり、イタリア語のものにロミティ Romiti, Guglielmo

(1850–1936) の『人体解剖学概論』全2巻の1899年版があった。英語の著名な解剖学書で、グレイ Gray, Henry (1825–1861) の『解剖学、記述と外科』(1858初版)、モリス Morris, Henry (1844–1926) の『人体解剖学論考』(1893初版)、カニンガム Cunningham, Daniel John (1850–1909) の『解剖学教科書』(1902初版)、フランス語の著名なもので、テステュ Testut, Jean Leo (1849–1925) の『人体解剖学概論』全3巻(1889–92)、ポワリエ Poirier, Paul Julien (1853–1907) 編の『人体解剖学概論』全5巻(1892–1904) は、1943年(昭和18)の調査で1904年より古い版の仙台での所在が確認できない²⁹⁾。

以上から1904(明治37)年の時点で、仙台医専にはドイツ語の解剖学書が数多く揃えられ、英仏の解剖学書も一部のものが存在したことが分かる。魯迅が受けた最初の解剖学の授業で外国語の解剖学書が供覧されたとすれば、おそらくドイツ語のものであったろうと推定される。

5. まとめ

20世紀初頭の仙台医専については、魯迅の「藤野先生」に対する関心から資料が豊富に収集されており、医学教育の状況が詳しく研究されている。そこでの解剖学の授業の中で、敷波重治郎と藤野巖九郎という東京大学の解剖学教室で学んだ2人の解剖学者が、解剖学史の講義を行っていた。

魯迅の「藤野先生」では、解剖学の最初の授業で藤野教授が日本の解剖学史の講義を行い、多数の解剖学書を供覧したと述べられている。その講義に対応する授業ノートは残されていないが、周辺の資料から仙台医専において解剖学史の講義が行われていたこと、解剖学の最初の授業を藤野教授が担当したことが確認され、「藤野先生」の描写通りに最初の講義が行われたことが推定された。

最初の授業における解剖学史の講義の内容は1901年に敷波教授が講義をして齋藤龍祥がノートに記録した解剖学史と同様のものではなかったと考えられる。また供覧されたと考えられる解剖学書も同定することができた。

齋藤龍祥のノートに書かれた解剖学史は、現代

からみてもバランスよく書かれた水準の高いものであった。このような充実した解剖学史の講義が、20世紀初頭の仙台で行われていたのである。明治2年に東京大学医学部で始まったドイツ式の医学教育が30余年を経て成熟したものになり、全国に広がっていた状況が窺われる。

謝 辞

東北大学の魯迅研究プロジェクトチームの方々からは、魯迅の授業ノートを含む膨大な資料を惜しみなく提供していただき、数えきれぬ示唆を与えていただいた。とくに大村泉教授と阿部兼也名誉教授からは、本稿の作成過程において貴重なご意見を頂戴することができた。深く感謝したい。

注と文献

- 1) 仙台における魯迅の記録を調べる会編：仙台における魯迅の記録。東京：平凡社；1978
- 2) 魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会編：魯迅と日本一魯迅生誕110周年仙台記念祭展示会図録。仙台：魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会；1991
- 3) 魯迅・東北留学百周年史編集委員会編：魯迅と仙台一東北大学留学百周年。改訂版。仙台：東北大学出版会；2005
- 4) 魯迅・日本東北大学留学百周年史編集委員会編、解澤春訳：魯迅と仙台一魯迅留学日本東北大学百周年。北京：中国大百科全書出版社；2005
- 5) 「藤野先生と魯迅」刊行委員会編：藤野先生と魯迅一惜別百年。仙台：東北大学出版会；2007
- 6) 坂井建雄：明治後期の解剖学教育一魯迅と藤野先生の周辺。解剖学雑誌。2007；82：21-31
- 7) 立間祥介訳：藤野先生。魯迅全集 第3巻。東京：学習研究社；1985；169-176
- 8) 坂井建雄：魯迅医学筆記から読み解く小説「藤野先生」。季刊中国。2007；88：35-54
- 9) 坂井建雄：魯迅と藤野先生の一九〇〇年（1）一仙台医学専門学校入学の前後。季刊中国。2007；90：62-74
- 10) 坂井建雄：魯迅と藤野先生の一九〇〇年（2）一藤野先生の添削が始まる、一年次の一学期。季刊中国。2007；91：43-52
- 11) 坂井建雄：魯迅と藤野先生の一九〇〇年（3）一解剖図の添削をめぐる、一年次の二学期と三学期。季刊中国。2008；92：19-28
- 12) 坂井建雄：魯迅と藤野先生の一九〇〇年（4）一二年次の一学期と二学期、退学に至るまで。季刊中国。2008；93：46-56
- 13) 坂井建雄：魯迅が「藤野先生」に書かなかったこと。図書。2008；707：6-12
- 14) 仙臺醫學専門学校編：仙臺醫學専門学校一覽自明治三十七年至明治三十八年。仙台：仙臺醫學専門学校；1904；p. 55-58
- 15) 敷波重治郎：思い出すことども。解剖学雑誌。1961；36：146-149
- 16) 関正次：敷波重治郎先生。解剖学雑誌。1965；40：381-382
- 17) 文献1, p. 319-326
- 18) 文献5, p. 188-189
- 19) 文献1, p. 111
- 20) 文献1, p. 170
- 21) 緒論に記された系統解剖学の7類の日本語による名称は、骨学、靱帯学、筋学、内臓学、脈管学、神経学、五官器学である。
- 22) 文献1, p. 259-276
- 23) 東北大学史料館所蔵の医薬学科日課表自明治三十四年至同三十五年による。
- 24) 泉彪之助：魯迅の大学ノート。福井県立大学看護短期大学部論集。1995；2：1-10
- 25) 楊燕麗：関于魯迅的“医学筆記”。魯迅研究月刊。1997；1997(1)：48-52
- 26) 藤野巖九郎：長大ナル茎状突起ニ就キテ。東北醫學會會報。1905；35：1-7
- 27) 奈良坂源一郎：解剖大全。全3巻。名古屋：奈良坂源一郎；1883
- 28) 奈良坂源次郎：完本解剖学者 奈良坂源一郎伝。船橋：奈良坂源次郎；2004
- 29) 日本解剖學會編：解剖學圖書目録。東京：日本解剖學會；1950
- 30) Hyrtl, J: Lehrbuch Der Anatomie Des Menschen. 8th ed. Wien: Wilhelm Braumüller; 1863
- 31) Rauber, A: Lehrbuch der Anatomie des Menschen. 4th ed., in 2 vols., Leipzig: Eduard Besold; 1892-1894
- 32) Gegenbaur, C: Lehrbuch der Anatomie des Menschen. 7th ed., in 2 vols., Leipzig: Wilhelm Engelmann; 1899
- 33) 坂井建雄：仙台の医学学校において1900年と1901年に講義された解剖学史。日本医史学雑誌。54：393-398
- 34) 杉田玄白〔他〕訳：解體新書。全5巻，〔江戸〕：〔須原屋市兵衛〕；1774
- 35) Kulmus, JA (au); DICTEN, G (tr): Ontleedkundige tafelen, benevens daar toe behoorende afbeeldingen en aanmerkingen. Amsterdam: Janssoons van Waesberge; 1734
- 36) 石田純郎：オランダにおける蘭学医書の形成。京都：思文閣出版；2007
- 37) 三谷公器：解體發蒙。全5巻，京都：河内屋藤四郎；1813
- 38) 宇田川榛齋：醫範提綱。全3巻，江戸：須原屋茂兵衛；1845
- 39) 田口和美：解剖攬要。全13巻，東京：英蘭堂；1877

- 40) 合信：全體新論。全2巻，京都：若山屋茂助，勝村治右衛門；1854
- 41) 松本秀士：清末刊行の中国文人体解剖学書について。日本医史学雑誌。2007; 53: 545-568
- 42) 坂井建雄：我が国の近代解剖学教育の成立過程。解剖学雑誌。2008; 83: 105-116
- 43) 今田東：實用解剖學。全3巻，東京：今田十五郎；1887-1888
- 44) 石川喜直：人体解剖学。全5巻，東京：吐鳳堂書店；1903-1904
- 45) Toldt, C: Anatomischer Atlas für Studierende und Ärzte. in 6 vols. Berlin: Urban & Schwarzenberg; 1896-1897
- 46) Schäfer, EA; Thane, GD (ed): Quain's elements of anatomy. 10th ed., in 3 vols. London: Longmans, Green, and Co; 1896-1899

On the Lecture on the History of Anatomy which Lu Xun Heard in Sendai

Tatsuo SAKAI

Juntendo University, Department of Anatomy and Life Structure

In “Fujino Sensei,” Lu Xun wrote that in his first lecture on anatomy, osteology Professor Fujino talked about the history of anatomy in Japan; although Lu Xun’s extant lecture notes do not show any mention of Fujino’s comments on the history of anatomy. However, since the lecture notes of senior students mention the history of anatomy, we do not find any reason to assume that Lu Xun did not hear about the history of anatomy in the lecture. Furthermore, the timetable of lectures indicates that the first lecture of anatomy was attributed to Professor Fujino. It is concluded that the description of the first anatomical lecture in “Fujino Sensei” was written based on Lu Xun’s actual experience. The lecture on the history of anatomy which Lu Xun heard was made by Professor Fujino; probably based on a lecture by Professor Shikinami which was recorded in the notes of Saito Ryusho, a student who was three years senior to Lu Xun.

Key words: History of anatomy, Meiji era, Medical education, Lu Xun, Medical school of Sendai